

■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

*: 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC: 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

: パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし: 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 UTokyo OCW 朝日講座「知の冒険」
Copyright 2015, 上丸洋一

The University of Tokyo / UTokyo OCW The Asahi Lectures “Adventures of the Mind”
Copyright 2015, Yoichi Jomaru

■ 1945年8月15日の東京朝日

2面に宮城前で「民草」がわびる写真なし

2面記事「玉砂利握りしめつつ 宮城を拝しただ涙」末常卓郎記者。いつ書いたのか

「神国日本を賛美し、戦意高揚を図る定型的な記事は、事実を見なくても書くことが可能であり、現に書かれていた」

「推測するに、末常が書こうとしたのは現実の宮城前広場の光景ではなかったのではない。それより末常は、敗戦という未曾有の事態を前に、『民草』がとるべき『正しい態度』（臣民の道）を記事で示そうとした。徹底抗戦に走るのではなく、天皇や軍部の責任を問うのでもなく、ひたすら泣いて『不忠』をわびる」

■ 同日の大阪朝日

2面に宮城前でわびる写真が入っている。これは何なのか

A（16日信濃毎日、山形、17日新岩手日報、神戸）

B（16日京都、西日本、17日島根、合同（現山陽）、東奥日報）

■ 東京朝日にはなぜ宮城前でわびる写真が載らなかったのか

撮れなかったカメラマン、影山光洋。自決の遺体はあったのか

■ 証言者「宮城前に人はいなかった」

星新一のエッセー「物見高き男」（『きまぐれ星のメモ』所収）

■ 評伝「星新一」が追認→ネットで語られる

2007年単行本

2010年文庫化 文章が修正されている

■ 証言者

「8月14日に写真を撮られた、15日の新聞に載った」

青森市の元教員／週刊新潮741010／文芸春秋2005年2月号

■ 証言者「宮城前に大勢の人がいた」

絵内正久／北野照日／影山光洋／花森安治／石川光陽

■ 8月16日の毎日新聞

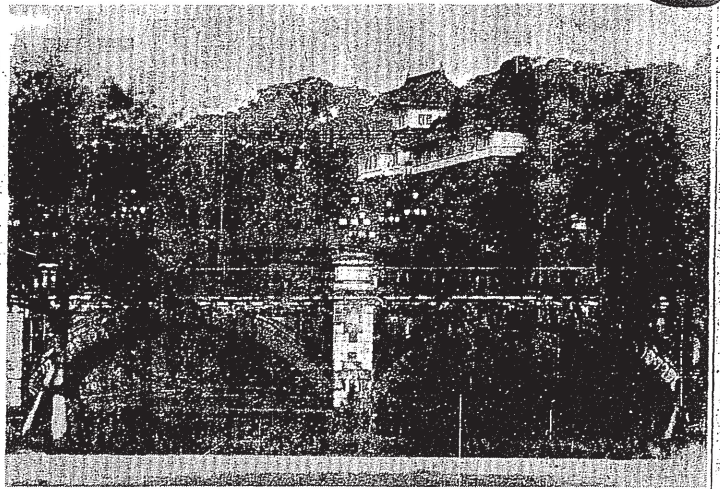
新藤健一「映像のトリック」

■ 同盟通信の写真 なぜ載らなかったのか

宮城前に人はいたのか、いなかったのか

■ 戦時報道とは何だったのか。事実とは何か

12



玉砂利握りしめつゝ 宮城を拜したる涙 鳴胸底決る八年の戦ひ

皇太子殿下が、この日、皇居に御臨幸され、皇太后陛下に御参上なされた。皇太子殿下は、皇太后陛下に、この八年の戦ひの顛末を御報告なされた。皇太后陛下は、皇太子殿下の御報告を御聴かれ、涙を流して御慰めなされた。皇太子殿下は、この日、皇居に御臨幸され、皇太后陛下に御参上なされた。皇太子殿下は、皇太后陛下に、この八年の戦ひの顛末を御報告なされた。皇太后陛下は、皇太子殿下の御報告を御聴かれ、涙を流して御慰めなされた。

己を捨て七生の誠を

神風隊市島少尉最後の一文
市島少尉は、この日、戦死なされた。市島少尉は、戦死するまで、己を捨て、七生の誠を貫き通された。市島少尉の遺書は、戦友や家族に宛てて書かれた。市島少尉は、戦死するまで、己を捨て、七生の誠を貫き通された。市島少尉の遺書は、戦友や家族に宛てて書かれた。

胸灼く痛憤堪へ抜かん苦難の道

歴史的論議の六日 聖断は遂に下る

億大御心に歸一せん

乏しき食糧を覚悟 整然たる供出 忍へ節食

歴史的論議の六日、聖断は遂に下る。億大御心に歸一せん。乏しき食糧を覚悟、整然たる供出、忍へ節食。この日、歴史的論議は六日目を迎えた。聖断は遂に下る。億大御心に歸一せん。乏しき食糧を覚悟、整然たる供出、忍へ節食。この日、歴史的論議は六日目を迎えた。聖断は遂に下る。億大御心に歸一せん。乏しき食糧を覚悟、整然たる供出、忍へ節食。

空母巡艦を大破

東海方面 荒鷲機動部隊を捕捉

我艦隊は八十三 機を撃破し、空母を大破

佳木斯で激戦展開

東海方面、荒鷲機動部隊を捕捉。我艦隊は八十三機を撃破し、空母を大破。佳木斯で激戦展開。この日、東海方面で荒鷲機動部隊を捕捉した。我艦隊は八十三機を撃破し、空母を大破した。佳木斯で激戦展開した。

維持せよ経済秩序

その混濁は百年の禍根

維持せよ経済秩序、その混濁は百年の禍根。この日、経済秩序の維持が重要であると述べられた。その混濁は百年の禍根を成す。この日、経済秩序の維持が重要であると述べられた。その混濁は百年の禍根を成す。

苦みに打勝ち

今まで通り勉強

苦みに打勝ち、今まで通り勉強。この日、苦みに打勝ち、今まで通り勉強した。この日、苦みに打勝ち、今まで通り勉強した。

産学開疎

産学開疎。この日、産学開疎が推進された。この日、産学開疎が推進された。

中東二機空母突入

中東二機空母突入。この日、中東二機空母突入した。この日、中東二機空母突入した。

P51百機来襲

P51百機来襲。この日、P51百機来襲した。この日、P51百機来襲した。

新編第一二五機来襲

新編第一二五機来襲。この日、新編第一二五機来襲した。この日、新編第一二五機来襲した。

座間農耕住宅地
新編農産品の商標

米大塚
新編農産品の商標

大塚能行氏
新編農産品の商標

高橋派系断絶本部
新編農産品の商標

工務局又官
新編農産品の商標

新編農産品の商標

新編農産品の商標

新編農産品の商標

新編農産品の商標

朝日新聞

本報創刊日 明治元年九月八日 社址 東京市本町三丁目

帝國再建に未曾有の聖斷

四國宣言を受諾 皇國不滅に敬慮

詔書

朕が世界ノ大勢ノ前途ニ憂ク非ず 措テ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル閣臣民ニ告グ 朕ハ帝國政府ヲシテ米英法露四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾ス...

大御心一つに隨順 國體護持こそ再生の活路

大御心一つに隨順 國體護持こそ再生の活路 皇國不滅に敬慮 皇國不滅に敬慮...

威派下る御言葉 神聖皇國の御言葉

威派下る御言葉 神聖皇國の御言葉 皇國不滅に敬慮 皇國不滅に敬慮...

廟議黎明に及ぶ 殘虐原子爆弾使用

廟議黎明に及ぶ 殘虐原子爆弾使用 聯參戰も戦局を急轉...

今こそ結束の秋 支拂制限せず

今こそ結束の秋 支拂制限せず 支拂制限せず...

平和政府樹立後 聯合國軍は撤收

平和政府樹立後 聯合國軍は撤收 聯合國軍は撤收...

一億相愛の秋 大御心一つに隨順

一億相愛の秋 大御心一つに隨順 大御心一つに隨順...

神聖皇國の御言葉 威派下る御言葉

神聖皇國の御言葉 威派下る御言葉 威派下る御言葉...

交際外交官

交際外交官 交際外交官...

神風

神風 神風...

大御心一つに隨順 國體護持こそ再生の活路

大御心一つに隨順 國體護持こそ再生の活路 國體護持こそ再生の活路...

二重橋前に赤子の群 立上る日本民族

苦痛突破の民草の聲

「二重橋前」に赤子の群、立上る日本民族。苦痛突破の民草の聲。...

原子核の分裂

最少火薬二萬噸に匹敵

原子核の分裂は、極めて少量の物質から、莫大のエネルギーを生ずる。...



眞珠灣以前に準備

かくて成る非人道的極致

一年中に互に秘密を保つ

眞珠灣以前に準備、かくて成る非人道的極致。一年中に互に秘密を保つ。...

住宅取壊しは中止

戦時住居は一應存続の方針

大都市再轉入は抑制

住宅取壊しは中止、戦時住居は一應存続の方針。大都市再轉入は抑制。...

貯金拂出しは無制限

電話も出来る限り復舊

貯金拂出しは無制限、電話も出来る限り復舊。...

食糧増産の先達

五穀類の増産

食糧増産の先達、五穀類の増産。...

薬するな百姓の誇り

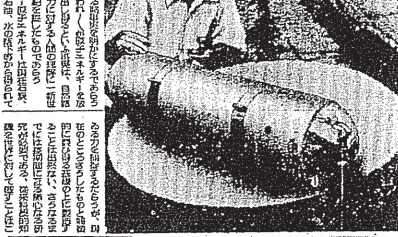
皇國國民としての自覚

薬するな百姓の誇り、皇國國民としての自覚。...

御不用品買受

求買家

御不用品買受、求買家。...



豪雨の中で戦線の真影

ロケット装置の操作を習熟

豪雨の中で戦線の真影、ロケット装置の操作を習熟。...

十平方キロが破壊

敵軍の戦線が崩壊

十平方キロが破壊、敵軍の戦線が崩壊。...

知れ自分の面

皇國國民としての自覚

知れ自分の面、皇國國民としての自覚。...

紫外線で強烈な火傷

落下傘は無線送信機

紫外線で強烈な火傷、落下傘は無線送信機。...

革命の出来

新機軸

革命の出来、新機軸。...

求買家

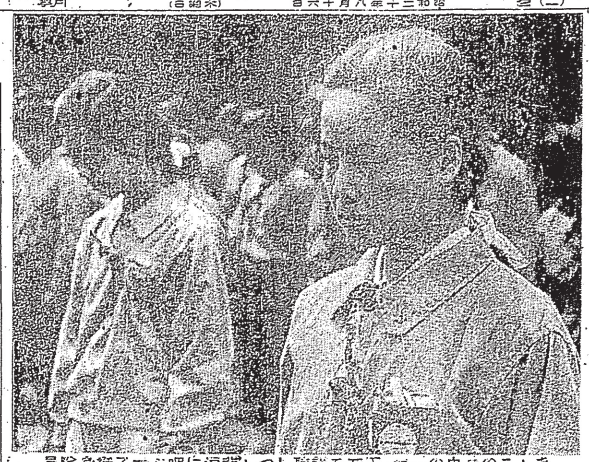
御不用品買受

求買家、御不用品買受。...

求買家

御不用品買受

求買家、御不用品買受。...



員隊身挺子女ら咽に涙眼、つし願請を音王、統一の史証のこゝろ

「新」新劇団「新」の公演、大成功を収めた。観客は、この新劇団の活躍に、大いに興味をもち、大いに賞賛を注いだ。この新劇団の活躍は、日本の新劇界に、大きな光榮をもたらした。この新劇団の活躍は、日本の新劇界に、大きな光榮をもたらした。

生活安定を計れ

狼狽せず親愛共助で

生活安定を計るには、親愛共助の精神が不可欠である。生活安定を計るには、親愛共助の精神が不可欠である。生活安定を計るには、親愛共助の精神が不可欠である。

換金をいそぐな

八月十五日銀行

換金をいそぐな。八月十五日銀行。換金をいそぐな。八月十五日銀行。換金をいそぐな。八月十五日銀行。

米英共同研究

米大戦の防衛策

米英共同研究。米大戦の防衛策。米英共同研究。米大戦の防衛策。米英共同研究。米大戦の防衛策。

鐵筋建物も腰ぐだけ

米大戦の防衛策

鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。

米大戦の防衛策

鐵筋建物も腰ぐだけ

米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。

鐵筋建物も腰ぐだけ

米大戦の防衛策

鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。

大阪各郊外電鐵

初終發時刻表

Table with 2 columns: Station Name and Time. Includes stations like 大阪, 吹上, 茨木, etc.

原爆子彈はど

獨と競り合ふ

七月十七日に初實驗

原爆子彈はど。獨と競り合ふ。七月十七日に初實驗。原爆子彈はど。獨と競り合ふ。七月十七日に初實驗。

戦争不平等

原爆子彈はど

戦争不平等。原爆子彈はど。戦争不平等。原爆子彈はど。戦争不平等。原爆子彈はど。

特殊處理のウラン

原爆子彈はど

特殊處理のウラン。原爆子彈はど。特殊處理のウラン。原爆子彈はど。特殊處理のウラン。原爆子彈はど。

後の下投

原爆子彈はど

後の下投。原爆子彈はど。後の下投。原爆子彈はど。後の下投。原爆子彈はど。

從來の作戰を一變す

原爆子彈はど

從來の作戰を一變す。原爆子彈はど。從來の作戰を一變す。原爆子彈はど。從來の作戰を一變す。原爆子彈はど。

鐵筋建物も腰ぐだけ

原爆子彈はど

鐵筋建物も腰ぐだけ。原爆子彈はど。鐵筋建物も腰ぐだけ。原爆子彈はど。鐵筋建物も腰ぐだけ。原爆子彈はど。

米大戦の防衛策

鐵筋建物も腰ぐだけ

米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。

鐵筋建物も腰ぐだけ

米大戦の防衛策

鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。鐵筋建物も腰ぐだけ。米大戦の防衛策。

大阪各郊外電鐵

初終發時刻表

Table with 2 columns: Station Name and Time. Includes stations like 大阪, 吹上, 茨木, etc.

閃光と重壓

鐵筋七六かり

閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

Table with 2 columns: Station Name and Time. Includes stations like 大阪, 吹上, 茨木, etc.

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

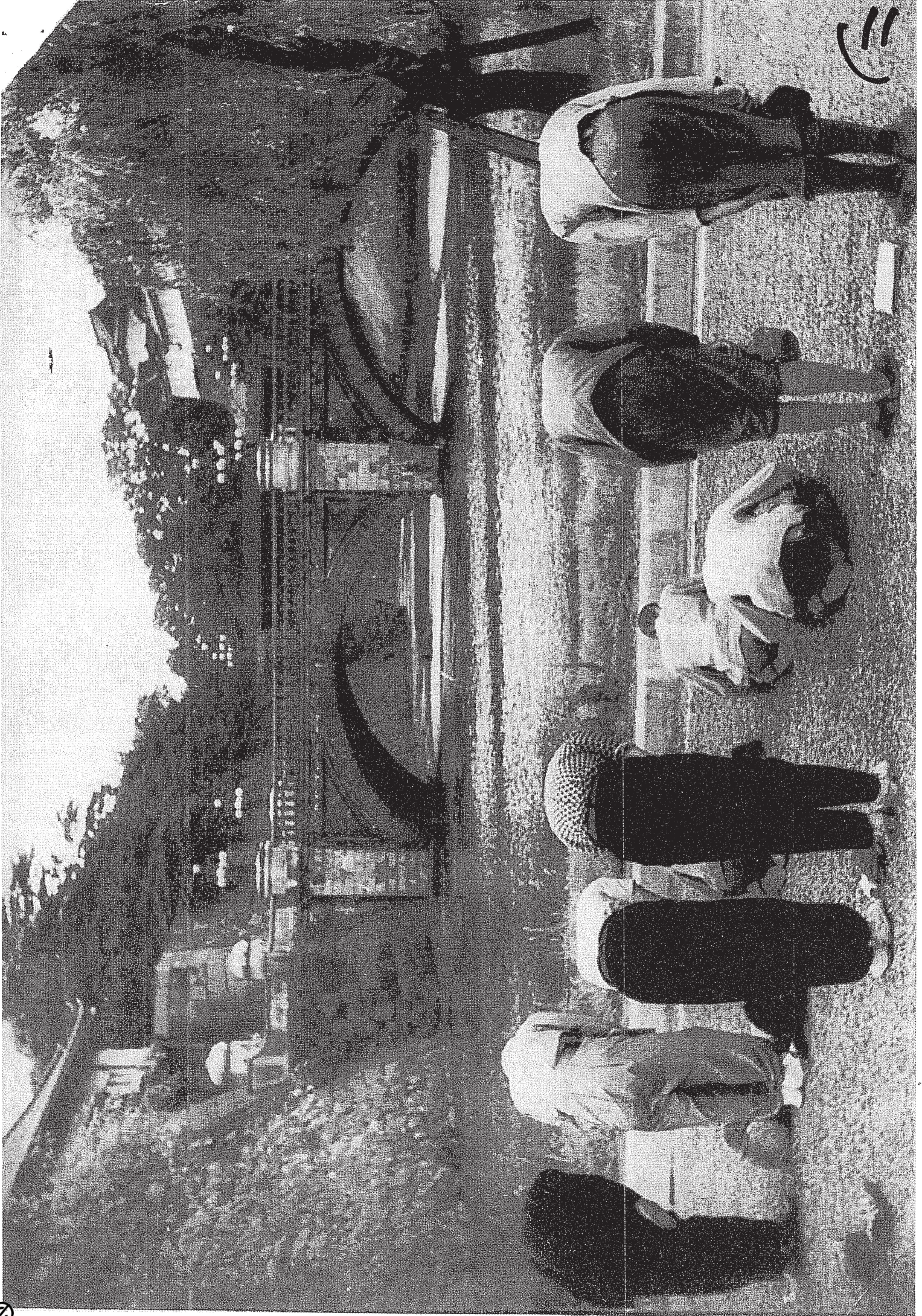
鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。鐵筋七六かり。閃光と重壓。

鐵筋七六かり

閃光と重壓

Table with 2 columns: Station Name and Time. Includes stations like 大阪, 吹上, 茨木, etc.





11

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を
削除しました。

予備写真
宮城を奉拝
第二部より記事が出るヨテイ
(写真説明は後で取りかへる)

(13)



著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を
削除しました。

20. 8. 15

同盟伝送

国体護持を血涙に誓いまつる宮城前の民草
説明明確を欠くものとす

播がぬ焦土金融陣 斷然多し預入

市森市各銀行に見る

市森市各銀行の預入状況は、金融陣の焦土に播がぬ断然多し預入を示している。これは、市民の不安感と、銀行の信用回復の兆しを示唆している。

市森市各銀行の預入状況は、金融陣の焦土に播がぬ断然多し預入を示している。これは、市民の不安感と、銀行の信用回復の兆しを示唆している。

市森市各銀行の預入状況は、金融陣の焦土に播がぬ断然多し預入を示している。これは、市民の不安感と、銀行の信用回復の兆しを示唆している。

縣都の衛生対策

中央病院 七動五十五施設

縣都の衛生対策として、中央病院の七動五十五施設が実施されている。これは、市民の健康と安全を守るための重要な取り組みである。

縣都の衛生対策として、中央病院の七動五十五施設が実施されている。これは、市民の健康と安全を守るための重要な取り組みである。

縣都の衛生対策として、中央病院の七動五十五施設が実施されている。これは、市民の健康と安全を守るための重要な取り組みである。



前城國に防護所を赤子(14日)

正しに残留届を
各種届出を平常化

各種届出を平常化
市民の生活に支障をきたさないよう、各種届出の手続きを簡便化し、平常化する取り組みが行われている。

戦災者
戦災者の救済と支援に関する取り組みが行われている。被災者の生活再建と心のケアが重点となっている。

赤子
赤子の健康と安全に関する取り組みが行われている。母子保健の充実と、児童虐待の防止が重点となっている。

戦災者
戦災者の救済と支援に関する取り組みが行われている。被災者の生活再建と心のケアが重点となっている。

赤子
赤子の健康と安全に関する取り組みが行われている。母子保健の充実と、児童虐待の防止が重点となっている。

赤子
赤子の健康と安全に関する取り組みが行われている。母子保健の充実と、児童虐待の防止が重点となっている。

赤子
赤子の健康と安全に関する取り組みが行われている。母子保健の充実と、児童虐待の防止が重点となっている。

戦災者
赤子
戦災者の救済と支援に関する取り組みが行われている。被災者の生活再建と心のケアが重点となっている。



八月十五日の、陛下が、皇居の空は青くすんで、からりとしたさわやかな上天気だ。この夏はもう二十日以上晴天続きで、伏見櫓の木立の緑も黒光りして、日ざしをはね返していた。午後の皇居の森のせみの鳴く声はまたときわ高かった。耳をすますと木立をゆする風の音か、ときの声のようざわわつく音が聞こえてきた。それはまた唸るような、すすり泣くようでもあった。

(何の音だろう) ふしぎなざわめきを確かめるため、衛兵所前に出た。すると音が大きくなった。伏見櫓にはね返って聞こえてくるようだ。鉄橋まで出てみた。鉄橋は照りつける強い日ざしで燃えていた。かげろうか、しきりに空気がゆらいで見えた。

その鉄橋から右手の広場を見下ろすと、なんとそこには蟻がうごめくように見えるが、人々が群がって、潮騒のようなざわめきは、皇居の森でも伏見櫓からでもなく、この二重櫓前の広場からだった。天皇の終戦の放送をきいて集まった人たちが、腹の底からぶりしぼっている声だった。森にぶつかっていた。さらによく見ようと、鉄橋の真ん中あたりまで出てみた。

石橋越しに眼をこらして広場を見おろすと、直立不動で首をうなだれた国民服姿、餅け付く玉砂利に上下座して動かない人、両手をあけて万歳を叫んでいる白エプロンにモンペ姿の一人、かげろうの向こうでみんな泣いているように見えた。広場を目ざしてひっきりなしに集まってくる人影は、ゆらゆらと軋りなげにゆらいで見える。自分たちの力の足りなかつたことを詫び、明日からどう生きて行けばよいか、何かよりどころをもとめて集まってきた迷える子羊の群れだ。この人たちは肩を落として拳を握りしめ、ひざ元に眼を落とし、皇居を見あげて何か語りかけ、祈り、願い、救いを求めているようだった。

敗戦日本がこれからたどる恥苦の道をどう切りぬけたらよいか、絶対に立ち上がって見せるぞと誓っているようでもあった。広場からまきあがる怒涛の寄せるがごときざわめきは、絶えることなく堤防上の松をゆさぶって正門櫓にぶつかり、伏見櫓をばげしくいつまでも揺さぶっていた。

しびれるような感動が私の身内を走った。私を感動させたのは、ぞくぞくと集まってくる人たちの純な心だった。私にはないものだからだ。

この人たちは日本が三大強国の一つであったときに生き、きようその強国が昔もなく崩れ、神国日本が亡びるのを見た人たちだ。栄光から一転絶望に沈んだこの人たちが、再起への決意を互いに確かめ合った。一台合唱が、皇居前広場に満ちて皇居をつつみ、古き日本への葬送曲のように私の耳に聞こえてくるのだ。

絵内正久『さらば昭和の近衛兵―兵たちの見た皇居内敗戦絵巻』(光人社、1992年) p.267~269

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を
削除しました。

朝日旧友会報 1965年10月号3面
「悲惨で撮れなかった 宮城前自決の写真」



47 涙の皇居前広場

終戦の詔勅。ラジオがいたんで雑音がひどく、はじめは何の意
味やらわからぬ人もあった。降伏とわかると、涙があふれ、や
がてガックリと力が抜けた。帝都は焼け野原と化し、当日は皇
居前を訪れる人もあまりなかった。くたびれたモンペによれよ
れのズボン、下駄ばきの女子挺身隊が何人か、ただ流れやまぬ
涙だけががあった。部下2人は涙でファインダーがくもってもとれ
なかつたという。私はこの写真は撮ったが、握りつぶした。そ
の結果、朝日は毎日に完全に抜かれてしまった。そして私は朝
日をやめることになった。

終戦は朝日における私のカメラマン生活まで終わらせてしまっ
た。私は人生を出直すために、無理やりにやめさせてもらった。
(昭和20年8月15日)

著作権等の都合により、 ここに挿入されていた画像を 削除しました。

新藤健一『映像のトリック』(講談社、1986年)
「2 ウソ報道写真一八〇一五土下座写真の不思議」
p58~59

軍人の自決のあととはついに見つけられることはできなかった。その
暗く重く静かなあつらえを一枚一枚撮り終わるや、わたしはゾス
クの任務に気がつき、かけよるに数寄屋稲穂社のわが社に引き
かえてきた。しかし、わたしは朝日新聞におけるカメラマン
としての仕事はそれまでであった。そのフィルムを理像しなかつ
た。部下が撮れないものを、撮ったからとって現像しなかつた
来なかつたからである。

こうして、朝日の紙面には当日の写真は載らなかつた。とこ
ろが某新聞には政治面の大半を占めて、皇居前の軍人自決場
の写真ががががと掲載されていた。まさかかと思つていたこ
とを、目のあたりに見せつけられて、思わず知らずあつと声を
のんだ。

その日の編集会議では、いまでもなく、この皇居前の写真
が問題となった。そして出た結論は

「取戦初日の新聞としては朝日は完全に負けていた。新聞に載
せるか載せないかは編集の問題であつて、新聞社のカメラマン
としては一応は撮っておくべきだつた」

ということだつた。わたしは、カメラマンとして、その写真
は確かに撮つた。しかし、それがぎりぎりの限界だつた。
わたしは南京戦を撮出した、山西南部作戦、徐州戦、マレー
上陸作戦、シンガポール攻略戦争等で、十たびも死線を突破す
ることが出来たが、不幸にして多数の戦友、後輩を戦場で失つ
ている。そのはての敗戦である。

「新しい酒は、新しい革袋に……」のたとえの通り、わたしな
りに振出しにもどつて、人生を再出発するために、その日むり
やりに辞表を出させてもらつて、いばらのみちをえらんで、十
七年の長い歳月、世語になつた朝日新聞社を涙と共に去つた。
その後数年たつて、当時の紙面を再び見て、玉砂利の上は泣
き伏しているのを、軍人が自決しているものと見誤つたことが
分り、その立派だと思つた作品も、実は、七枚の写真を貼り
合せて、二十三名もの多数に水増しした作り写真であつたのを、
見破るゆとりがない程の強いショックが、わたしを辞職に追い
やつたことがわかつた。

『影山光洋写真展図録 知つていますか?日本に戦争が
あつた時代を』(立命館大学国際平和ミュージアム、2
003年) p82

敗戦！そして迎えた八月十五日、正午。朝日新聞社の社員一
同は、七階にあった講堂に集まつたが、当日写真部のデスク当
番だつたわたしは、数人のカメラマンと写真部のラジオの回り
に集まつて、陛下の玉音放送を聞いた。陛下のお声は低く高く
揺れて、「忍びがたきを忍び、万世のために……」放送が終
わつてもややしばし、わたしたちの回りには、ただ暗薄とした
深い空虚だけが残つた。しかし、時は一刻と冷静に刻んでい
て、午後二時から二時へ、北海道や東北地方へ送り出す早版
の締切時間は迫ってくる。

「皇居前広場を撮ってきてくれ」
社会部(いまの報道部)からの注文がきた。デスクのわたし
の命を受けて、Aカメラマンは出かけて行つた。しかし、一と
きも待たぬうちに、呆然とした格好でもどつてきた。

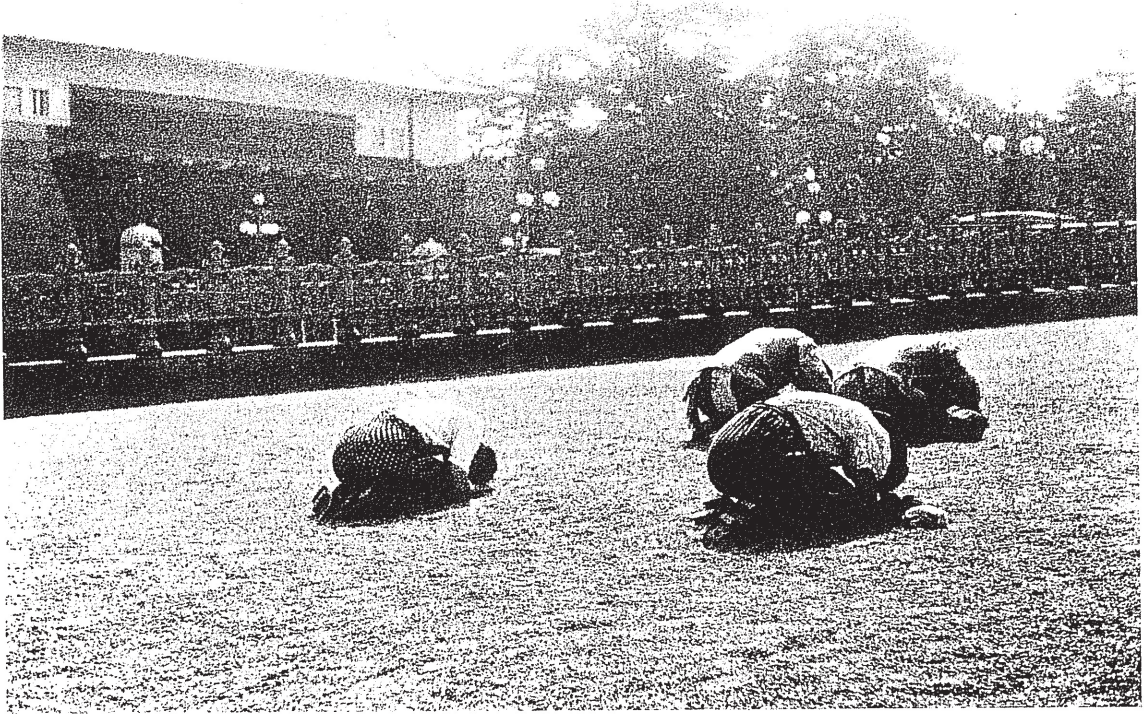
「とても撮れやしない。ファインダーが曇つちややつて……」
それが当然だ、日本人だつたらそんなふさふさな写真なんか撮
れるか、撮れなつて新聞にはのせられるものかと、わたしは腹
の中でぞうりなずいてみせた。社会部のデスクへ足を運んで了
解を求めた。しかし、すぐ追つかけるように、今度は紙面を作
る整理部から直接に注文があつた。

「二重橋前で軍人が刺腹自殺している。部員がいま見てきたか
ら、早版に間に合わせてくれ給え」

とじまじきの注文である。わたしはやむなくBカメラマンを
出した。しかしそのカメラマンも、間もなく引つ返してきた。
目を赤く泣きはらしているの、撮れなかつたことが一目見て
わかつた。

わたしはふたたび、整理部へ了解を求めに重い腰をあげねば
ならなかつた。しかしそれはさすがにためらわれた。わたしは
愛用のライカカメラを片手に、真階段を背かに降りて、日劇横
に急ぎ出た。有楽町のガード下から毎日新聞社の横を抜け、
隣端から駆けるように皇居前へと急いだ。行き会ふ人の中には
女子学生もいて、手に手に堅くハンケチを握りしめていた。女
子挺身隊員らしき女性も、まぶたを赤く泣きはらして、涙はま
だそこに光っていた。

広い皇居前には、ちらほらと人が見えるだけで、あたりは全
く静かだつた。玉砂利を深く踏みわたしの足音だけが、ざわざ
わと高く音を立てた。二重橋前までくるとはじめて、何人かが
ぼつんぼつんと玉砂利の上に立ちたり降ったりして、ひざまずいた
りしていた。ある者は、ひざの上に両のこぶしを握りしめ、あ
る者は、頭を深く垂れ砂の上にぼろぼろと涙を落としていた。
どこからともなく、低く緩く「君が代」の音が流れてきたが、



*



*

42. 終戦翌日に皇居前にひざまづく人々

8月15日、ラジオを通して玉音放送が流れ、人々は戦争が終わり、日本が負けたことを知る。

翌日、皇居前広場にて土下座してひれ伏す人々の姿が見られた。

東京都千代田区 昭和20年8月16日 石川光陽撮影

昭和会館「戦後70年写真展 写真集」

2015年12月7日(月)

朝日講座「知の冒険」 媒介／メディアのつくる世界 最終回(延長回)

上丸洋一氏・吉見俊哉先生

— 新聞報道についての“歴史的事実”と公正性 —

グループワークのテーマ

「自国が戦争を始めたとき、新聞（あるいはジャーナリズム）は自国と相手国との間で中立であることができるか。なぜ、そう考えるか。

（別の言い方をすれば、新聞は〈国籍〉や〈国益〉の枠内にあるべきか、それともそれを越えるべきか。越えることは可能か。なぜ、そう考えるか）」